

◆ アクティブラーニングの“肝”◆

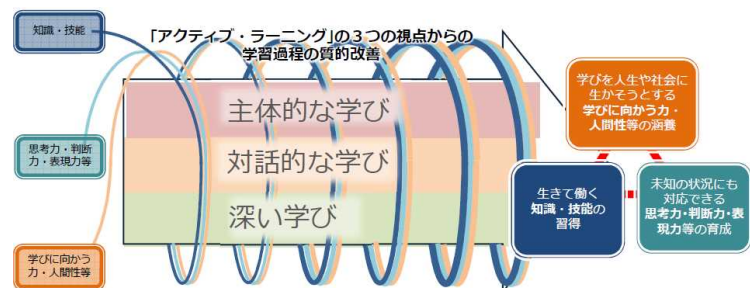
新しい学習指導要領改訂の方向性を示した中教審答申「何ができるようになるか・何を学ぶか・どのように学ぶか」（平成28年12月）の3視点のなかで「どのように学ぶか」に関わる部分がいわゆるアクティブラーニング。

過日、本校での「探究」学習をいかに進めるかにあたり、昨年度、桐蔭学園を視察させていただいたご縁で、「資質・能力育成のためのアクティブラーニング型授業－ポストコロナ・Society 5.0も見据えて－」の演題で、理事長の溝上慎一先生のオンライン研修を実施した。年度当初は、先生に直接ご来校いただき、本校での研修を想定していたのだが、COVID-19拡大のあおりを受け、オンラインでの講演・研修とした。

様々な資料をご提示いただいた。その“肝”となるのがこの図と考えている。

先生は、これを同時に回すこと、加えて「ICT利用」を強調された。中でも「対話的な学び」に注目してみたい。

以前にも[「探究」学習の紹介](#)で述べたが、「対話（dialogue）」



（中教審答申（平成28年12月21日）補足資料p.12より）

と「会話（conversation）」の棲み分けができているか、それが深い学びに繋がっているかをよく吟味しなければならない。授業を中心とする全ての教育活動において、それが上滑りな「会話」に終始していないか、次の段階にまで止揚された「対話」になっているか、意識することが求められていると考える。「対話」には、例えば井戸を掘るように物事を深く掘り下げるイメージがある。ゆっくりでもいいから、根気強く、納得のいく「深い学び」につなげていきたいものである。

最後に、溝上先生はアクティブラーニング型の授業について、これまで携わられたいくつかの学校の事例を引き、「生徒と教師の信頼関係」がその成立に大きく関与することについて言及された。全員が取り組む姿勢であること、そして最も強く印象に残っている言葉が「**おへそを前に向けること**」。

おへそを前に向ければ自ずと相手と正対し、相手の話を誠実に聞く態度につながる。アクティブラーニング型授業に限らず、これはすべてのコミュニケーションの基本であろう。ディスプレイ越しではあったが、本校職員の質問にも時間の許す限り答えてくださった。「探究」学習を含めた「深い学び」を目指したいと思う。溝上先生、今回はありがとうございました。